

# 浦和ラグビースクール

創立30周年記念誌

*Courtesy*  
*Courage*  
*Consideration*



# 「礼儀」「勇気」「思いやり」



## 浦和ラグビースクール憲章

『浦和ラグビースクール憲章』制定にあたって

浦和ラグビースクール(以下URS)は、ラグビーを通じて子供達の健康な身体と精神を育成したいとの思いから1984年、代表の飯塚博明氏を中心に12名の児童と3名のコーチで発足しました。

子供達の中には色々な体格や運動能力の子がいます。ラグビーでは、それぞれにふさわしいポジションがあり、ルールに基づきそれぞれの持ち場で精一杯努力し、お互いに助け合うことで参加する全ての子供がゲームを等しく楽しむチャンスを得ることができます。それがラグビーと言うスポーツの素晴らしさです。「ラグビーは少年を大人にするスポーツである」と言われます。また、ラグビーを通じ相手を敬う気持ちやフェアプレー、ノーサイドの精神など子供たちが成長していく上で、また日々生活していく上で必要な様々なことを体感できるスポーツです。

一人でも多くの「ラグビーの好きな子供を育てる」という考えのもと、URSでは日頃の練習だけでなく合宿、遠征などの行事においても、準備から後片付けに至るまで全て指導者自らが行う自主運営を基本として活動しています。子供は、自分自身の喜びや楽しみのためにラグビーに参加しているのであり、親や指導者の喜びのためではないことを忘れてはなりません。全ての子供がゲームに出場し、純粋に楽しむ場を提供すること、子供達の成長を見守る姿勢を持ち続けることこそ指導者の役割と考えています。

URSではスクール生ならびに指導者を含めた全員が平等に会費を納めています。さらにURS創立当時の命名にも由来するのですが、「スクール」の名にこだわったのは、ラグビーを通じて「学習」という強い思いと子供達に教える以上、「学習」することは指導者の責務であると位置づけています。

URSは、父母会を設けていませんが、保護者の皆様に三信条をご理解していただくことでスクール活動が成り立っています。

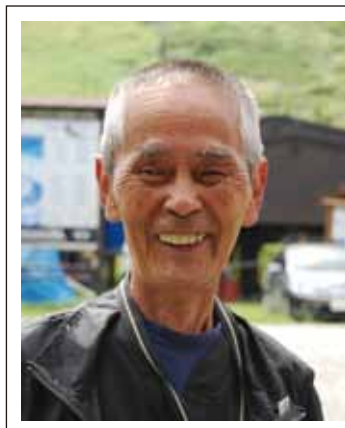
創立当時から受け継がれるURSの三信条を再確認すると共に、子供たちのために子供たちを中心とした浦和ラグビースクールに関わる私達は、ここに「浦和ラグビースクール憲章」を制定いたします。

2008年12月21日

## 浦和ラグビースクール憲章

～浦和ラグビースクールに関わるすべての人たちへ～

1. 私達は「礼儀」「勇気」「思いやり」の気持ちを大切にします。
2. 私達はラグビーが好きな仲間を増やします。
3. 私達はラグビーを通じて成長します。



浦和ラグビースクール校長

飯塚博明

# URSの“絆”を大切に

8月1日、私は満72歳を迎えました。息子と始めたキャッチボール感覚のラグビーがスクールへとつながり、気がつけば30年です。スクール創設当時、周囲からは「サッカーの街・浦和でラグビー？」と言われたこともありましたが、ただ、大学時代の先輩や後輩が近県でラグビースクールを立ち上げ、交流試合のために遠征の機会を与えていただけたのも幸いでした。

### 私のラグビー人生

私のラグビー人生のスタートは、浦和高校へ入学した56年前にさかのぼります。柔道部へ入部しようと思ったのですが、部員の体の大きさに圧倒され、水泳部に変更しようとプールへ足を運んだ時、グラウンドで小柄な選手が頑張っているのが目に入り、即座にラグビー部への入部を決めました。3年生では全国大会へも出場でき、大学卒業後はレフェリー、スクールのコーチとして、今日までラグビーを継続することができています。

昭和59年4月、コーチ4人、子供10人程度で産声をあげた浦和ラグビースクールですが、現在ではNPO法人さいたま市地域スポーツクラブ遊の中核団体として着実に地域に根を下ろしています。すでに卒団生は500人を超え、トップリーグ、大学、高校で活躍する選手を多数輩出しています。ただ、何より嬉しいのはスクールを巣立って行った卒団生が今ではコーチとして子供たちを指導してくれていることです。

### 三信条の会得

私の指導者としての信念は一貫して「インディビジュアルスキル」(個々のプレイヤーに求められるスキル)の向上です。子供のラグビーにユニット・チームスキルは必要ないと考えます。個人スキルの高い選手が集まれば結果は必ず出るはずですが、子供たちからの求めがあればユニットスキルも教えることはありますが、個人スキルに特化することがスクールの使命だと思っています。

また、スクールの基本理念である三信条「礼儀・勇気・思いやり」は、どんなスポーツにとっても大切です。とりわけラグビーでは「思いやり」が最も重要と考えており、子どもたちがラグビーを通じて会得してくれることを願っています。さらに学校の違う子供たちが週一回、一緒にグラウンドで汗を流し、卒団後も互いに連絡を取り合い、友人関係を続けてくれています。こうしたURSの“絆”を今後も大切に、輪を広げることで40年、50年とスクールの歴史を積み重ねて行って欲しいものです。(談)



※校長の顔写真にはARが埋め込まれています。スマートフォンを使って動画をみてみよう。  
ARについての説明は4ページをご覧ください。



# Photo Gallery



赤枠の画像は AR が埋め込まれております。  
アプリをインストールして、画像を読み込もう！



**専用アプリ(無料)COCOAR(ココアル)が必要です。**

App Storeで検索



## 卒団生インタビュー

### 卒団生が語る「URSと私」

指導者として戻ってくるOBたち  
彼らの原点は練習後の“アイス”？



毎週日曜日の午後、大原グラウンドの中央にある小橋の脇にあるベンチに陣取る“愉快的仲間たち”をご存知でしょうか。浦和ラグビースクールOBを中心に立ち上げたクラブ遊ミドルチームのメンバーで、今ではコーチも務めてくれている卒団生たちです。今回、30周年記念誌の発刊に当たり「URSと私」をテーマに少年時代を振り返りながら、大いに語っていただきました。

**飯塚** 校長である父がコーチを始めていたこともあって、小学校3年生からラグビーを始めました。スクールの歴史が、そっくり私のラグビー人生と言っても過言ではありません。ミドルチームのメンバーとは、スクール時代に必ずしも一緒にプレーはしていないものの、URS卒団生ということで楽しく交流しています。

**南田(真)** 小学校5年生で入団し、36年間生きている中で26年間はURSにかかわっています。そして何より感慨深いのは、自分が教えてもらったコーチに今、息子が二世代にわたって指導を受けていることです。現在、ミドルチームでプレーしながらコーチも務めています。あえて息子には、他人であるコーチから褒められたり、怒られたり、親とは違う人の話をいっぱい聞いて成長して欲しいと思っています。

**南田(辰)** 兄が入団していたので、小学校5年生の時に入団しました。それまでサッカーをやっていたのですが、サッカーで相手を倒すとコーチに叱られたのですが、反対にラグビーでは体当たりをして褒められたのが子供心に嬉しかったことを覚えています。私も兄と一緒にミドルチームでプレーしていますが、今はコーチを優先しています。何故なら指導の現場で、相手に指導内容を理解し

てもらうのは大変ですが、遣り甲斐があります。**北村** 大宮西中学校のラグビー部を引退後に入団しました。14年前、ミドルチームと一緒にプレーしている南田(辰)さんに指導を受けました。茨城県へ遠征に行き、茗溪学園と清真学園の部活チームを破ったことは今も二人にとって忘れられない良い思い出です。スクールの楽しい雰囲気は中学時代から今も変わりません。年齢に関係なくフラットな関係が私にとって、とても心地よい場所です。

**吉田** 自分自身がラグビーをやりたいこともあって10年以上、グラウンドへ通い続けています。大宮西中学校ラグビー部在籍中に埼玉県選抜としてゲームに出場できた喜びが忘れられず、この時の感激が今もラグビーを続けさせているのだと思います。また、中学部活の同級生である北村君と再びミドルチームと一緒にプレーできるのもURSの存在があってこそだと感謝しています。

**古舘** 小学校5年生の時、ラグビーを観戦するのが好きな父の勧めで入団しました。練習後にもらえるアイスにひかれて毎週、グラウンドへ足を運びました。卒団後は大東一高から立正大へ進学し、ラグビーひと筋にここまで来ました。大学在学中にU19日本代表としてアジア大会、世界大会に出

場できたのもスクールで学んだおかげです。その意味では、“アイス”が私の原点でしょうか。グラウンドに行けば必ず知った顔がいるので、楽しくラグビーをしています。今は、スクールでお世話になった分、恩返しさせていただきたいと思っています。

**吉谷** スクール卒団後、高校では剣道をやっていました。高校3年生の夏、ラグビーを再び始めたのが切っ掛けで、もう一度、ラグビーやりたい

と思って URSに戻ってきました。久し振りに顔を出した時、自分を指導してくれた当時のコーチが顔を覚えていてくれ、笑顔で温かく迎えてくれたのが印象的でした。以来、グラウンドに足繁く通うようになりました。今では教える楽しさも少しですが分かるようになりました。生意気ですが、社会貢献、さらに人脈を広げる場としてスクールは、私にとって大切な存在です。

### 卒団生



南田 辰之介



南田 真太朗



北村 圭



飯塚 貴夫



古舘 優



吉谷 開



吉田 遼太

### 独 白 ～お爺ちゃんコーチ～

浦和ラグビースクールとの出会いがなければ、これほど長くラグビーと関わりを持つことはなかったでしょう。そして何よりコーチとしてラグビーの普及・育成の一端を担えたということを誇りに思っています。

今回、仕事が忙しい中を白馬村のサマーキャンプに参加してくれたOB7人に話を聞く機会を頂戴しました。2泊3日のキャンプ中、流しそうめんやバーベキューの準備をはじめ、年少のスクール生の相手をしてくれるなど大活躍でした。ラグビーのキャンプでしたが、彼らはボールに一度も触れなかった者もいるのではないのでしょうか。校長の号令のもと、文句ひとつ言わずに黙々とキャンプの運営を支えてくれました。

今や立派な成人の彼らですが、私は幼い時代を知っているためか、成長した彼らの姿を見ると目を細めてしまいます。これも長くコーチをさせていただいている特権でしょうか。川に放流したアユの稚魚が戻って来てくれたような気がします。最近では、戻ってきた卒団生の子供が入団しています。嬉しい限りです。これからも老骨に鞭打って稚魚を育てていきたいと思っています。



## 監督挨拶



浦和ラグビースクール監督  
廣本 慶一

### ラグビーは子供たちが行う最高のスポーツ

#### スクールの理念に共感して監督に

ラグビーというスポーツは、他のどのスポーツよりも全身を使い、走り、ぶつかり、転がり、投げ、蹴る、すべての要素が含まれているスポーツです。このようなスポーツは他にありません。まだ成長期にある、そして将来のある子供たちが行う最高スポーツです。

私は16年前に長男と一緒に入団し、すぐにコーチに就任しました。当時は、ラグビー未経験者のコーチも多くいらっしゃいました。私自身は、高校からラグビーを始め、大学、社会人と30歳までプレーを続けました。私の中にラグビーとはこういうスポーツだという思いがあり、最初の頃は大人のやるようなラグビーのプレーを教えていました。

ある時、友人がグラウンドに見学に来ました。彼に「小学生が大人のようなラグビーをやる必要がどこにあるの?」「子供のポテンシャルは計り知れない、今ラグビーを教えて型にはめるよりも、鬼ごっこのような身体を動かす方がよっぽど大切」「ラグビーを教えるのは中学や高校からで十分間に合う。今はラグビーらしいラグビーを教えることは将来にとってマイナスになる」と。

当時、高校日本代表のコーチをしている友人にも同じことを言われました。それから私の考え

は変わりました。子供たちが、今ラグビーをやる必要がどこにあるのか。将来、子供たちが高校、大学でラグビーを続けるかどうかはわからない。もしかしたら他のスポーツの方が才能あるかもしれない。その中で出した結論が冒頭の言葉です。今ラグビーを続けることが、必ず子供たちの将来の役に立つ。できれば、子供たちにいつまでもラグビーを続けて欲しいと思います。でも将来自分にあったスポーツを見つけたら、いろいろなスポーツに挑戦して欲しいと思います。きっと、浦和ラグビースクールでラグビーを続けていたことは役に立ちます。ラグビーに限らず、何かスポーツを続けて欲しいと思います。

私は16年間浦和ラグビースクールでコーチを続け、5年前に前任の一ノ瀬さんから監督を引き継ぎました。私がコーチを続け、監督を引き受けたのは、浦和ラグビースクールの理念に未だに共感しているからです。そして飯塚校長の人柄というか人間性が好きだからです。最近、スクールのモットーである「礼儀・勇気・思いやり」が少しおろそかになっているような気がします。私の責任でもあります。もう一度みんなでの思いを考えていきたいと思っています。



## キャプテン挨拶



Aチームキャプテン  
黒澤 侃生

### キャプテン指名は夢かと思った

親に勧められて小学1年生の時にラグビー教室に参加したのが入団するきっかけでした。初めて参加した練習で、タックルとパスをコーチにほめてもらい嬉しかったこと、鬼ごっこが楽しかったことを覚えています。

キャプテンに指名された時は夢かと思ったほど驚きました。でも、キャプテンになってからは5年生の時以上に頑張るようになってきました。そして、何よりも自分から進んで大きな声を出すようにしています。チームメイトも私を理解してくれ、全員が協力してくれて感謝しています。チームをまとめるのは大変ですが、やりがいもあります。

ラグビーの楽しさは、タックルしてボールを奪い取ることです。痛いこともあります。来年は中学生になりますが、ジュニアチームでラグビーは続けたいと思っています。(談)



ジュニアチームキャプテン  
馬場 玲玖

### 率先して全力プレーで臨む

小学校4年生の夏、合宿直前に同級生に誘われて入団しました。最初は、自分に果たしてできるかが不安でしたが、Bチームが楽しい雰囲気だったことから、すぐに仲間に溶け込むことができました。そして何も分からずに参加した合宿も楽しかったなど、「楽しい」の第一印象が強かったからこそ、中三までラグビーを続けて来られたのだと思います。

キャプテンとして試合の時は、タックルに真っ先に行く、辛い練習の時は声を出すなど、率先して全力プレーで臨むことで、仲間を引っ張っていきたくと思っています。

目標は東日本大会で代表チームとなって花園へ行くことです。今年の3年生が強かったこともあり、今の3年生が4人と少ないので、少しでも今年の3年生に追いつけるように頑張りたいです。そして高校では花園を目指します。(談)

ROSSIGNOL 

U

礼儀 勇気 思いやり  
浦和ラッパースクール

